［論文］

アイデンティティーの相克

—— ボスニア・ムスリムによるアンドリッチ批判の系譜 ——

奥　彩子

はじめに

イヴォ・アンドリッチ（Ivo Andrić, 1892–1975）ほど、ユーゴスラヴィア解体によって評価が揺れた作家はいないだろう。アンドリッチは、自他ともに認める、数少ない「ユーゴスラヴィア」の作家だった[1]。1961 年にノーベル文学賞を受賞したからだけではなく、彼の出自、人生、文学、思想のすべてが、「南スラヴ人の国（ユーゴスラヴィア）」を指し示していたからである。アンドリッチの文学は、「民族の坩堝」であるバルカンで、人びとが共生する証として扱われていた。しかし、90 年代に国家解体をめぐって衝突が深まると、クロアチア、ボスニア・ムスリム（ボシュニャク）[2]、セルビアのそれぞれに、アンドリッチは否定されたり、利用されたりした。たとえば、ザグレブのとある書店でアンドリッチは外国文学の棚に置かれた[3]。セルビア側ではスルプスカ共和国初代大統領ラドヴァン・カラジッチがアンドリッチの短篇「1920 年の手紙」を必読書とし、戦争の正当化に利用したという[4]。否定がもっとも激しかったのはボスニアである。トラヴニクでは博物館となっていた生家が閉鎖され、ヴィシェグラードではムスリム過激派がアンドリッチの記念碑を破壊した。ハンマーで頭部を粉々にし、「お前は十分に書いた、今度は泳げ」と言ってドリーナ川に投げ込んだという[5]。ボスニア・ムスリムのアンドリッチに対する憎悪を極端に表現したのが、1991 年にサラエヴォで刊行されたムスリムの若者向け雑誌『VOX』の表紙である。そこには、アンドリッチがペンで串刺しにされる姿が描かれていた[6]。

アンドリッチ批判が政治的扇動のみであれば、反響は限定的だったであろう。しかし、1995 年にサラエヴォ大学教授ムフシン・リズヴィチの 600 頁を越える大著『アンドリッチの世界におけるボスニア・ムスリム』が出版され、アンドリッチが「反ムスリム」であるとの主張が声高になされると、国内外の文学研究者から次々と反論がなされた[7]。日本でも田中一生が論文「アンドリッチの「アリヤ・ジェルゼレズ」」において歴史小説の読解という観点からリズヴィチ批判を行っている[8]。ボスニア・ムスリムによるアンドリッチ批判はその後も続き、2013 年には「アンドリッチ主義——虐殺のための美学」[9] と題した論文が英語の学術誌に掲載され、「ボシュニャク学界によるイヴォ・アンドリッチの悪魔視が世界に示された」[10]。2016 年にはアンドリッチについての否定的意見を詳細に検討した博士論文も提出されている[11]。アンドリッチの

文学について論じるときに、ボスニア・ムスリムからの批判を無視することはもはやできなくなったように思われる[12]。

ノーベル文学賞を授与されたユーゴスラヴィア唯一の作家とはいえ、なぜこれほどまでの関心が一人の人物に向けられたのか。そして、国家解体から四半世紀近くが過ぎてなお、アンドリッチ批判が絶えないのはなぜか。本論文では、アンドリッチの伝記的事実を概観したのち、90 年代に端を発したかに見えるボスニア・ムスリムのアンドリッチ批判を 60 年代にまでさかのぼって検討し、その系譜をたどることで、こうした疑問を検討したい。

1. 人生と文学

アンドリッチはかつて同じくボスニア出身の作家メシャ・セリモヴィチにこう語ったという。「作家の人生について関心を持つというのが不思議だ。どうして本で満足しないのだろう？［…］何も隠してはいない。すべては本に書いてある」[13]。本人の望みに反して、アンドリッチの生涯はますます関心を集めている。人生と文学のかかわりを考えること自体の政治性に注意しながら、アンドリッチの一生を振り返っておこう[14]。

ラドヴァン・ポポヴィチは著書『アンドリッチ――ノーベル賞作家の伝記』を次のように始める。「人生の最後までアンドリッチは頑固で、自分が生まれたのは 1892 年 10 月 10 日だと信じていた」[15]。そして、トラヴニクのカトリック教会の出生記録には 10 月 9 日生まれ、両親ともにカトリック教徒と記されていると述べる。不確かさは出生日だけではない。生地が正しいかについても、アンドリッチは明確な回答を避けたという[16]。そもそもアンドリッチの両親はトラヴニクに住んでいたわけではない。身重だった母カテリーナが親戚を訪問した折に、たまたま産気づいてしまったために、トラヴニク近郊で生まれることとなった。父アントゥンはサラエヴォで真鍮製品の製造をしていたが、イヴォが二歳の時に結核で亡くなった。母カテリーナは絨毯工場で働くために息子を義姉アナに預けることにする。アナは、ポーランド出身の夫イヴァン・マトコヴシクとともに、セルビアとの境の町ヴィシェグラードに住んでいた。子供のいない夫婦は甥を実の子のように扱った。「彼らは第二の両親だった」[17]。ヴィシェグラードはドリーナ川とルサヴ川の合流地を中心とする町である。イヴォは毎日ソコロヴィチ橋を渡って小学校に通った。少年時代の思い出はのちに『ドリーナの橋』として結実する。1904 年にサラエヴォのギムナジウムに入り、再び母と暮らしはじめる。ギムナジウムでは数学で躓き、なんどか落第を経験している。1911 年、南スラヴの文化的統一を訴える文芸誌『ボスニアの妖精』[18] に自作の詩が初めて掲載された。卒業後はまずザグレブ大学に在籍し、詩人マトシュと知り合う。ウィーン大学に移籍するものの、健康を害してクラクフ大学に移動。この地で第一次世界大戦の勃発を知

る。身の危険を感じてクロアチアに戻り、各地を転々とするものの、ほどなく逮捕される。ギムナジウムの後輩であり、サラエヴォ事件の実行犯であるガヴリロ・プリンツィプが所属した「青年ボスニア（Mlada Bosna）」との関係が疑われてのことだった。特赦によって自由の身になるとザグレブに戻り、文学仲間たちとともに雑誌『南方文芸』を刊行する。この雑誌はわずか 2 年で廃刊になるが、クロアチア、スロヴェニア、セルビア各地の文学者が寄稿し、「ユーゴスラヴィア文学」の幕開けを予感させた。最初の詩集『黒海より』（1918）と第二詩集『不安』（1920）、短編集『アリヤ・ジェルゼレズの旅』（1920）を相次いで出版する。1920 年に外務省に入ってからは、外交官としてヨーロッパ各地に住むことになった。外交官の職に博士号が必要になったため[19]、1924 年にはグラーツ大学に博士論文『トルコ治下のボスニアにおける精神生活の発展』（ドイツ語）を提出した。外交官として活躍しつつ、文学面においてもいくつかの短篇集を上梓している[20]。1939 年、最後の任地となるベルリンにユーゴスラヴィア王国の特命全権公使として着任。1941 年にドイツ軍がユーゴスラヴィアに侵攻すると、アンドリッチは帰国させられる。ナチス占領下のベオグラードで、作品の再版さえ拒み、完全な沈黙を貫く。この間に執筆されたのが、ボスニア三部作と呼ばれるようになる長篇小説群『ドリーナの橋』『ボスニア物語』『サラエヴォの女』だった。1945 年にはユーゴスラヴィア連邦議会議員となり（1953 年まで）、翌年にはユーゴスラヴィア作家同盟議長となっている（1952 年まで）。1954 年には『呪われた中庭』を発表。同年、ユーゴスラヴィア共産党に入党している。1961 年にはノーベル文学賞を授与された。1972 年にヴーク・カラジッチ文学賞とユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国社会主義功労英雄の称号と勲章を授与されている。このように、アンドリッチは名実ともに、「ユーゴスラヴィア」を代表する作家であった。

2. 移民雑誌『ボサンスキ・ポグレディ』とシュクリア・クルトヴィチ

アンドリッチが非難の対象となったのは、ノーベル文学賞受賞の直前だった。仕掛けたのはヨーロッパに政治亡命していたボスニア出身のムスリム、アディル・ズルフィカルパシッチ[21]。のちに新国家ボスニア・ヘルツェゴヴィナの初代副大統領となる人物である。ズルフィカルパシッチはウィーン在住のボスニア・ムスリムであるスマイル・バリッチの協力をえて[22]、1960 年 8 月にボスニア移民向けの総合雑誌『ボサンスキ・ポグレディ（ボスニアン・ビュー）』を創刊した。編集人は雑誌の意義について、「南スラヴのムスリムの気持ちを正しく伝える、真摯な雑誌の必要性は大きくなるばかりである。無知な外国人たちにムスリムの代表を騙って、我々の感情と切望をでっちあげる、無責任な輩に欠かないからだ」と述べる[23]。また、ムスリムは「平和と協働の指導者となり、自由と民主主義のための闘争の担い手」[24]とならねばならないと説く。そのためには「民族、信仰、階層における憎悪の感情はすべて退ける。[…] 民族的、

信仰上の狂気の過去に戻ってはならない」と宣言する。一見、道理にかなった言葉の裏には、良きムスリムの姿をヨーロッパ社会に周知させたいという切望がうかがえる。「ムスリムに否定的なアンドリッチ」はまさに格好の標的だった。1961 年 3 月に掲載されたアンドリッチについての最初の記事は「共産主義者たちはイヴォ・アンドリッチ作品の批評を握りつぶしている」という題である。冒頭を見てみよう。

> よく知られているように、イヴォ・アンドリッチの作品は、敵対的な傾向ゆえに、ボスニアのムスリムのあいだでは至極真っ当な憤りを受けてきた。イヴォ・アンドリッチが『ドリーナの橋』を書いたのは、チェトニクが罪もない多数のムスリムを虐殺していたときであり、この作品はヨーロッパ社会向けに虐殺を正当化するために必要だった。[25]

彼らの主張によれば、アンドリッチが「ユーゴスラヴィア最大の作家」というのは共産党のプロパガンダであり、共産党がアンドリッチ批判を封じている。そこで、『ボサンスキ・ポグレディ』ではこうした記事の一つであるシュクリア・クルトヴィチの批評を今後全文掲載していく、と告げる。続けて、アンドリッチ批判の一例として、ベオグラードの雑誌『正書法便り』による記事を転載してもいる[26]。

予告通り、翌 4 月号にはクルトヴィチの論文「友愛と団結に鑑みる『ドリーナの橋』と『ボスニア物語』」が、ズルフィカルパシッチの「序文にかえて」という紹介文とともに掲載された。この号では、バリッチと思しき人物「B」による「イヴォ・アンドリッチを暴かねばならない」というエッセイも掲載されており、アンドリッチがいかにムスリムに対して否定的な態度であったかが、博士論文『トルコ治下のボスニアにおける精神生活の発展』に言及したうえで述べられている。そして、アンドリッチを「歴史、文学、心理学、社会、もちろん、宗教、民族の視点といったすべての面から暴かねばならない。これらすべての観点において彼の作品にはぬぐいされない染みがある」と結論する[27]。反アンドリッチ・キャンペーンともいえる一連の流れは、ズルフィカルパシッチとバリッチにとって、アンドリッチこそ「無責任な輩」の筆頭だったことを示している。ノーベル賞の受賞は、彼らにとって、国内外においてアンドリッチ作品の影響力が増すという最悪の事態を意味した。したがって、アンドリッチのノーベル賞受賞に際して批判記事が掲載され、その後もいくつかの批判記事が掲載された。クルトヴィチの連載は 63 年 11 月号まで 14 回にわたって続いた。

クルトヴィチによる論文は、「以後のアンドリッチ批判の主要な論調を作った」と評されるほど[28]、大きな影響を及ぼすことになる。そもそも、クルトヴィチとはどういう人物だろうか。シュクリヤ・クルトヴィチ（1890–1973）はボスニア南東部のガツコに生まれたムスリムの政治家、評論家である[29]。若くしてユーゴスラヴィア主義

に傾倒し、オーストリア・ハンガリー帝国によるボスニア併合に異を唱えるムスリム団体で頭角を現した。モスタルのギムナジウムを卒業した後、ウィーンで法学を学んでいるときに、『ムスリムの民族化について』（1914）を著し、宗教的帰属は民族的帰属ではないと主張している[30]。この文脈において、クルトヴィチは自身をセルビア人とみなしていた。第一次世界大戦時にはオーストリア・ハンガリー軍の徴兵を逃れるためにロシアに赴き、セルビア義勇軍の組織化に携わった。200 人からなるムスリム人部隊を組織したとされる。戦間期は汎セルビア・ムスリム団体「ガイレト」に参加し、国会議員に三度選出された。第二次世界大戦中はパルチザンに参加したものの、戦後は政界を引退し、評論家として活躍した。

クルトヴィチのエッセイ「友愛と団結に鑑みる『ドリーナの橋』と『ボスニア物語』」[31]はそのタイトルがすでに語っているように、アンドリッチの二つの長篇小説をユーゴスラヴィア主義の観点から批判するのが目的である。全体で 50 頁近い長文において、クルトヴィチがまず異議を唱えるのは、アンドリッチが作中においてムスリムを「トルコ人」と呼称したことである[32]。アンドリッチ自身が当時の呼称であると注記をしていることに言及しつつも[33]、登場人物同士の会話のみならず語り手がこの表現を使用することを、作家自身の使用と同一視して咎めている[34]。さらに、アンドリッチの作品においてムスリムの描かれ方が否定的であり、現実に反すると指摘する。クルトヴィチによれば、『ボスニア物語』には共感できるムスリムは一人もいない。『ドリーナの橋』において、ムスリムはセルビア人を串刺しの刑にする野蛮人であり、近代になっても、セルビア人に比べて時代遅れな考えを持つ人々として描かれている。唯一、共感できる人物であるアリホジャでさえ、残酷な罰を受けさせられている。オスマン帝国治下の民衆の苦しみを描きながら、オーストリア・ハンガリー帝国の支配については否定的に書かれていない、等々。アンドリッチ作品の文学的価値まで否定したあと、クルトヴィチはこう結論づける。「二作品は、今日からみて全くのアナクロニズムであり、友愛と団結に極めて否定的な影響を与え、この先も長く一貫して築き上げねばならないその理念にとって真に危険であり、進歩的な人々の大多数のあいだに当然の不服を、ムスリムのあいだに激しい嫌悪を引き起こすと心底確信している」[35]。クルトヴィチにとって、ムスリムは民族ではなく宗教である。アンドリッチがムスリムをキリスト教徒と異なる集団、あたかも一つの民族であるかのように描いていることが、ユーゴスラヴィア主義に反すると見えたのだった。

ユーゴスラヴィア主義を高らかに謳う文章が、反共産主義と民主主義を標榜する移民雑誌に掲載された経緯とその後について触れておこう。クルトヴィチの論文は国内では掲載を断られ、第三者の手によってズルフィカルパシッチにわたった[36]。ズルフィカルパシッチはクルトヴィチの論文にもろ手を挙げて賛同しているわけではない。「著者は若き日の民族的偏見からまだ解放されておらず、賛成しかねる点がある」[37]。これ

はクルトヴィチがムスリムを民族とみなさない点についての不同意である。ズルフィカルパシッチにとって、見過ごせなかったのは、ユーゴスラヴィア主義よりも、ムスリムについての見解の相違だったことがわかる。しかし、すぐに彼は続ける。「とはいえ、こうしたことがこの論文とその著者の比類ない価値を減じるものではない。著者は常に勇敢にボスニア・ムスリムを擁護してきた」[38]。政治思想の根幹において二重に異なりながらも、ズルフィカルパシッチは、共産党に守られたアンドリッチをボスニア・ムスリムのために批判したという一点においてクルトヴィチを評価したのだった。

『ボサンスキ・ポグレディ』はヘクトグラフによる雑誌であり、流通は極めて限られていた。したがって、この反アンドリッチ・キャンペーンは当時は大きな注目を浴びなかった。その後、1971 年にドイツ語圏で、1984 年にはロンドンで、一巻本にまとめられて再版され、本国でも徐々に知られるようになる。とはいえ、クルトヴィチの批判論文が本格的に影響力を発揮するようになるまでには、さらにしばらくの時間を要した。

3.「ボスニア精神」の在り処――ムハメド・フィリポヴィチ

移民雑誌『ボサンスキ・ポグレディ』でアンドリッチ批判が展開されていたころ、ボスニア本国では、ムスリムの扱いをめぐる大きな転換点が訪れていた。もともと、オスマン帝国支配下のボスニアでは、住民は宗教ごとに分けられ、それぞれの社会を形成していた。つまり、宗教は「疑似民族的なカテゴリー」として機能していた[39]。ハプスブルク帝国の支配がはじまると、財務大臣カーライが、ボスニアという共通のアイデンティティーを構築する「ボスニア主義(bošnjaštvo)」を提唱する[40]。この政策は、セルビア、クロアチアによる宗教的同一性あるいは言語的同一性に基づいた民族意識がボスニアに浸透するのを防ぐことを目的としていた。「ボスニア主義」は広く浸透しなかったものの、一部のムスリムのエリートに受け入れられ、文化的集団としての「ムスリム」の形成につながる[41]。ユーゴスラヴィア王国時代、社会主義ユーゴスラヴィアを通じて、ムスリムを民族と主張する動きはあったものの、いずれ「ユーゴスラヴィア人」という統合的な民族に至るものと期待されていた[42]。そこに変化が生じたのが 1960 年代である。中央集権制から各共和国への分権化という路線転換が行われるに伴い、「ムスリム人の政治的地位をあいまいにしておくことはもはや不可能となった。[…] セルビア人、クロアチア人と同等の政治的・文化的権利を主張するためには、法的に連邦の構成民族として認められる必要があった」[43]。1961 年の人口調査で「ムスリム人（エスニックな帰属という意味で)」という新しい民族帰属のカテゴリーが導入され、1963 年のボスニアの新憲法でムスリムは「固有のエスニック・グループ」であることを認められる。しかし、どちらも具体的な説明に欠けており、ムスリムが

少数民族なのか、セルビア人、クロアチア人と並ぶような民族なのかは明確ではなかった[44]。そのため、「ムスリム」概念は、1968 年にボスニア共産主義者同盟中央委員会において「固有の民族（narod）である」と決定され、1970 年のユーゴスラヴィア共産党中央委員会の正式承認に至るまで、大きな論争となった。

サラエヴォ大学教授ムハメド・フィリポヴィチ[45]の批評「文学におけるボスニア精神――それは何か？」（1967）は、こうした政治状況のなかで書かれた。フィリポヴィチは、マック・ディズダルの詩集『石の眠り人』（1966）[46]こそボスニア精神であると論じるにあたり、これまでボスニア文学がそれ以外の国民文学の補助概念として扱われており、ボスニアの歴史的経験に深く根差した文学以外を含有してきたと批判する。そして、その例として、ペタル・コチッチ、スヴェトザル・チョロヴィチ、アンドリッチといった「セルビア文学」がボスニア文学とみなされてきたと述べる。フィリポヴィチはさらに次のように主張する。

> ボスニアを辺境として、ボスニア人を民族精神と民族意識の辺境に住む者としてしか見ない、そうした民族意識に息づく文化が現れた。［…］そうした文学が、過去 100 年にわたってボスニアで生み出され、軍隊が行進で踏みにじり血を流させる以上に、ボスニアを分断してきた。1000 年の厳しい歴史を通して苦しみながら築いてきた基本原理としての共通感情と人生観という、ボスニア精神も分断した。そうした文学は 1870 年代にはじまり、とくに 20 世紀初頭に民族運動の昂まりとともに増えた。民族精神を鼓舞したのは、コチッチ、チョロヴィチ他であり、最良かつ最大の代表であるアンドリッチにおいて全盛を極めた。民族精神による文学の最高水準に達したアンドリッチは、最良の作品と思われる『呪われた中庭』においては、自らのヴィジョンを普遍化せねばならなかった。そのため、彼のヴィジョンから偏った民族的、経験的、精神的趣向と枠組が薄れはじめ、超越性が現れてきた。[47]

フィリポヴィチにとって、ボスニア文学とは、民族を超越した統合的な「ボスニア精神」を描くものでなければならない。したがって、アンドリッチの作品のように、多様性の融合を描かず、複数の民族集団が生きる土地としてボスニアを扱うことは、隣国（セルビア、クロアチア）のナショナリズムに加担し、ボスニアを分断するものでしかなかった。また、この論文では、オスマン帝国による支配がボスニア文化の豊かさに重要な貢献をしたとし、ボスニアにおけるムスリムの重要性が強調されていることも忘れてはならない。そのうえで、フィリポヴィチは、ムスリムであるディズダルの『石の眠り人』の詩的言語について、「いくらか新機軸であったり、古語を用いたりしているものの人工的ではなく」、「内発性をもち、ボスニアの運命を詩に表現するという考えに適している」[48]として芸術性を見出し、ボスニア文学が自らの土地との

つながりを失わず普遍性にたどりつく道を示したとして高く評価する。「ボスニア精神」を強く主張する文章は論争を呼び、フィリポヴィチはユーゴスラヴィア共産党委員会から一時的に除名処分を受けたものの[49]、このエッセイは「ムスリム／ボシュニャク人の民族的神話の決定版」となった[50]。長文がアンドリッチに直接言及しているのはわずか二か所に過ぎないが、クルトヴィチのユーゴスラヴィア主義とは異なり、ボスニア・ムスリムの立場から「アンドリッチに対して異を唱える一本の流れ」[51]の始まりとなった。

4. 反アンドリッチの文献学——ムフシン・リズヴィチ

60年代に始まった、アンドリッチ作品を反ムスリムもしくは大セルビア主義としてみる批評は、広く一般に共有されることはなかった。しかし、70年代以降、一部ムスリム知識人のあいだでは口頭で語られるようになり、次第に正当性を増していった[52]。80年代になると、徐々に印刷物でもアンドリッチ批判が見られるようになる[53]。そして90年代、アンドリッチに対する否定的見解は頂点に達する。1990年、ボスニアに帰国したズルフィカルパシッチは、冒頭で触れた雑誌『VOX』を刊行し、反アンドリッチ・キャンペーンを展開した[54]。また、1991年には『ボサンスキ・ポグレディ』を復刊し、クルトヴィチの論文を連載のかたちで再掲している[55]。こうしたキャンペーンに扇動された敵意は、ヴィシェグラードで記念碑が壊されるという結果をもたらした。一連の行為は録画されており、イゼトベゴヴィチ率いる民主行動党がアラブ世界から援助を集める際に、「我が国のサルマン・ラシュディの像を壊した」として披露されたという[56]。しかし、これらはあくまで、政治的な動機に根差した言動であり、アンドリッチ作品の文学的価値を脅かすものとは受け止められていなかった。こうした出来事はメディアを賑わせたものの、国内外の文学研究者たちの多くは、きちんと読みさえすればアンドリッチの多文化主義が理解できると信じていた[57]。そこには、ラシュディ事件で指摘された「民衆」対「エリート」（アンドリッチの場合は「アマチュア」[58]対「専門家」）に近い構図を見出すこともできるだろう[59]。

そうした構図を転覆させたのが、ムフシン・リズヴィチ（1930–94）の『アンドリッチの世界におけるボスニア・ムスリム』（1995）である[60]。著者がボスニア文学史を専門とするサラエヴォ大学教授であったことだけではなく、アンドリッチ作品から多くを引用し、微に入り細に入って反ムスリム性を指弾した手法に、多くの文学研究者が反論の必要性を覚えることになった。700頁近くに及ぶ、五部立ての大著は、文学史研究者である著者にふさわしく、ムスリムを主題にした最初の散文作品『アリヤ・ジェルジェレズの旅』から博士論文、未完の小説『オメルパシャ・ラタス』、さらに対話録、エッセイ集を扱う[61]。そして、アンドリッチが生涯を通じて反ムスリムの思想を持っていたことを、博士論文を根拠にしつつ、「立証」して見せる。ボスニア・ムスリム

を執拗に「トルコ人」と呼び続けたこと、ボスニア・ムスリム叙事詩の英雄アリヤ・ジェルゼレズを好色な男に脱神話化したこと、グラーツ大学に提出した博士論文においてオスマン帝国による支配がボスニアの発展を妨げたと主張したこと、セルビア人をオスマンによる支配下での犠牲者として描いたこと、歴史資料を用いつつムスリムを史実よりも否定的に描いたこと[62]、ボスニアの「暗さ」、分断、摩擦を描いたこと。こうしたすべてがアンドリッチ自身の反ムスリム傾向をあらわにしているというのがリズヴィチの主張である。リズヴィチは、バリッチが早くから着目していた博士論文を立脚点としつつ、ズルフィカルパシッチとフィリポヴィチが主張するムスリムを中心に据えた統一的なボスニア精神という価値観にもとづき、脚注でクルトヴィチをはじめとする『ボサンスキ・ポグレディ』の反アンドリッチ記事をふんだんに引用しながら、クルトヴィチ同様、細部にこだわって論を展開していく。まさに、アンドリッチ批判の集成といってよい。

リズヴィチは、アンドリッチが反ムスリムの態度を取った理由を、まず第一にセルビアの読者におもねるという意図があったこと[63]、第二に、アンドリッチ自身が抱えていた心理的問題にあると説明する。

> 多くの例に見られるように、アンドリッチ作品の「ボスニアの憎悪」と「東方の毒」には二つの心理的原因がある。一つは、個人的なトラウマ、神経症――精神病的なもの、もう一つは、君主制への民族的 - 政治的迎合に際して、トルコがコソヴォで犯した罪と復讐の神話を、トルコ人の精神的、道徳的、社会的、文化的、民族的派生であるボシュニャク人に適合させるという、現存的、実存的なものである。[64]

リズヴィチの批判は、伝記に基づく心理分析が主であり[65]、文学作品は、すでにある結論、すなわち、アンドリッチは反ムスリムであり、セルビア人によるボスニア・ムスリム殺戮を正当化しているという主張を補強するために用いられている。リズヴィチは、「第二次世界大戦の虐殺の正当化」というズルフィカルパシッチの主張を繰り返し、また、自身もそれを適用する。たとえば、『ボスニア物語』のエピローグで、ムスリムの老人が「そんなものはまるっきりなかったかのように忘れてしまうだろう、そしてすべては神の意志によって何時ものようになるだろう」と語る場面については[66]、次のように説明される。「具体的な名前と出来事を寓意、象徴と捉えれば、この格言のような省察は第二次世界大戦と関連づけることができるし、読者の世代によって今日までのすべての征服戦争と関連づけることができる」[67]。

リズヴィチは青年期に、アリヤ・イゼトヴェゴヴィチも参加していた政治的な地下組織の一員だったという[68]。1990 年には、ボシュニャク人のための文化機関「復興(Preporod)」の再興にあたり、初代会長となっている[69]。『アンドリッチの世界におけ

るボスニア・ムスリム』の出版を託されたエネス・ドゥラコヴィチは、リズヴィチのあとに「復興」の会長となった人物である。書物の出版の背景に政治的意図があったことは疑いようがない。そして、アンドリッチが描くボスニアは「明らかに彼らの政治目的には多様すぎる」[70]。さらに、当時のボスニア・ムスリムにとって、オスマン帝国の支配と結びつけられることは、ムスリム・アイデンティティーの危機であるだけでなく、政治的立場の弱体化も意味していた[71]。こうした理由から、アンドリッチの作品が「ボスニア文学」、「ボスニアの歴史を描き出す」として受容されることは許しがたいことだったものと思われる。

リズヴィチの著作の目的は、アンドリッチの反ムスリム精神を暴くことだけではなく、それをボスニア国内で表明し、周知の事実とすることにあった。その目的は達せられた。さらに、『アンドリッチの世界におけるボスニア・ムスリム』はアンドリッチ作品を読むという責務から、ボスニア・ムスリムを解放した。「声高に反アンドリッチを表明する者の多くがアンドリッチを自分では一冊も読まずに、リズヴィチの本をたよりに憤りを増幅させることだろうことはほぼ間違いない」[72]。リズヴィチは、いわば、アンドリッチに関する文献学を提供し[73]、アンドリッチに反ムスリムのイメージを固着させることに成功した。文学研究の分野においても、リズヴィチの批判に応える必要性が生じた。リズヴィチがアンドリッチの博士論文と文学作品を不可分なものとして提示したことにより、多くの研究者が、アンドリッチの作品について「文学作品として読まなければならない」と注釈をつけ、オスマン帝国の支配を否定的に論じた博士論文との切り離しを主張せねばならなくなった。アンドリッチは、その人物と作品すべてにおいて肯定的な存在というわけにはいかなくなったのである。

5. オリエンタリズムの地平―― 21 世紀のアンドリッチ批判

死後出版されたリズヴィチの著作集『文学研究』の序文において、編者のムヒディン・ジャンコはその多様な業績を紹介しながら、物議をかもしたアンドリッチに関する研究について、次のように述べる。「ムフシン・リズヴィチがエドワード・サイードの文化研究業績をどのくらい知っていたのか、そもそも知っていたのかも、今となっては憶測することしかできないが、リズヴィチの自己認識はともかく、今日の文化学的観点から言えば、彼の著書『アンドリッチの世界におけるボスニア・ムスリム』(1995)は、アンドリッチをオリエンタリズムの観点から批評する初めての試みであったと言えるだろう」[74]。ジャンコはさらに続けて、このアイディアを深めたのが 2000 年にトゥズラで出版された論集『アンドリッチとボシュニャク人』であると紹介する[75]。

論集『アンドリッチとボシュニャク人』はトゥズラで 1999 年に開かれたシンポジウム「歴史的、社会的コンテクストにおけるイヴォ・アンドリッチの作品」がもとになっている。シンポジウムが開催されたのは、「復興」のトゥズラ支部長が、アンド

リッチを大セルビア主義者と糾弾し、トゥズラにある「イヴォ・アンドリッチ通り」の改名を求めたためである。論集の編者であるサラエヴォ大学教授ムニブ・マグライリッチは、リズヴィチ、ドゥラコヴィチのあとに「復興」の会長となっていた（任期は 1994 年から 2001 年）。論集の出版元が「復興」であることも注意しておきたい。「編者のことば」はシンポジウムが開催された経緯と論集の構成を説明したあと、次のような言葉で締めくくられる。

> 過去と現在の複雑なバルカンの現実において、ボシュニャク人はたえず敵対的なイデオロギーにさらされてきた。こうしたイデオロギーにおいて、ボシュニャク人は「歴史の罪」ゆえにこの地域から追い出さねばならないと考えられてきた。文学の分野において、反ボシュニャク・イデオロギーをもっとも支え、今日に至るまで反ボシュニャク的な実践を助長しているのは、ニェゴシュ、マジュラニッチ、そしてアンドリッチの作品である。文学作品への内在的なアプローチで疲弊しないようなやり方で、こうした作品を理解し、解釈することは、ボシュニャク人にとって、生き残りをかけた闘いをするうえで、重要な仕事である。この闘いは直近の出来事（1992–1995 年のボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国に対する攻撃）によって、著しく緊迫している。編者はこの論集がその闘いに貢献することを願い、そうした考えの記しとして本書を公刊するものである [76]。

論集は三部構成になっており、第一部にはシンポジウムでの発表を中心とした 12 本の論文、第二部には「アンドリッチとボシュニャク人」に関連する過去の 4 本の論文（クルトヴィチの論文も所収されている）、第三部には同じテーマの文献目録が収められている。第一部の執筆者は歴史学（オスマン史、中世史）、教育学、哲学など多岐にわたるが、反アンドリッチ運動をはっきりと批判しているのは、ネジャド・イブラヒモヴィチの論文のみである。多くは、リズヴィチの著書を踏まえ、批判の射程をさらに広げる（たとえば、アンドリッチだけではなく、セルビアのアンドリッチ研究者をも大セルビア主義者と批判する、あるいはアンドリッチ作品の文学としての価値を否定する）ものであった [77]。

アンドリッチ批判にサイードのオリエンタリズムを援用しているのは、第二部に収録されたサラエヴォ大学でアラブ文学を教えるエサド・ドゥラコヴィチの論文「ヨーロッパ中心主義のなかのアンドリッチ作品」である [78]。ドゥラコヴィチは、まず、アンドリッチがヨーロッパ中心主義ゆえにノーベル賞を授与されたとする。そして、サイードの『オリエンタリズム』から「オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式なのである」[79] という一節を引用し、「オリエンタリストは、東方を既成事実とみなし、自らの研究対象として完全に閉じ込める」と

要約する[80]。ドゥラコヴィチによれば、アンドリッチ文学は「ボスニアのオスマン化（otmanizacija Bosne）」をしており、それは「オリエントのヨーロッパ中心主義的オリエント化（evrocentristička orijentarizacija Orijenta）」[81]につながる。すなわち、西洋によって権威づけされた作家が、ムスリムを劣った存在として描くことにより、ムスリムの若者に恥の感情を植えつけてオリエンタリズムの内面化をもたらす危険をはらむと言うのである。こうして、ドゥラコヴィチは、アンドリッチ作品を「文学がイデオロギー化する否定的な例」として学校で教えることを主張する[82]。だが、この論文において、ドゥラコヴィチがアンドリッチの作品をヨーロッパ中心主義の観点から具体的に検証することはない[83]。「彼の文学作品に関する多くの分析が、著者のヨーロッパ中心主義的なイデオロギー的位置が、現実の人種差別のレベルにまで過激化していることを明白に示している」[84]。リズヴィチが集成した文献学にもとづいて、アンドリッチ作品の反ムスリム性を「既成事実とみなし、自らの研究対象に完全に閉じ込める」行為は、ドゥラコヴィチが批判するオリエンタリズムの構造そのものである。

翻って、アンドリッチとムスリムの関係を、サイードが言う「オリエンタリズム」に適合させることは簡単ではない。一つめの支配側（オスマン帝国）と被支配側（ボスニア）、二つめの支配側（オーストリア・ハンガリー帝国）と被支配側（ボスニア）、ユーゴスラヴィアとボスニア、クロアチアとセルビアとボスニア・ムスリムといった何重にも捻じれた権力関係は、サイードの二項対立的概念では説明しきれないからである[85]。アンドリッチの作品を「オリエンタリズム」の観点から論じるためには、まず、オスマン帝国の支配とオリエンタリズムの関係性について、オスマン帝国支配下にあった他の地域をふくめて検討する必要があるだろう[86]。ドゥラコヴィチが「オリエンタリズム」「ヨーロッパ中心主義」という言葉を用いるのは、「支配者」側であったムスリムの過去を描く作品を現代の批評理論で否定し、「被害者」としての立場を強調するためにすぎない。

リズヴィチを分水嶺として、オリエンタリズム概念の恣意的利用へと到った反アンドリッチの流れは現在も途絶えたわけではない。2013 年、ルスミル・マフムトチェハイッチは学術誌『東ヨーロッパの政治、社会』に「アンドリッチ主義―虐殺のための美学」を寄稿し、アンドリッチ批判を世界に向けて発信した。マフムトチェハイッチは 1948 年にボスニア南部の町で生まれ、サラエヴォ大学で工学の博士号を取得したのち、オシエク大学（クロアチア）の工学部で教えていた人物である。90 年代にボスニア・ヘルツェゴヴィナ政府で首相補佐、産業大臣を経験したあと、論壇に転じ、数多くの著作を出版している。挑発的なタイトルの文章は 50 頁近くにおよぶ。文学批評を意図的に逸脱し、ムスリムの知的伝統によってアンドリッチ作品を評価する試み[87]、抽象的な小題（「罪」「美」）は、学術誌にふさわしいとは思えない[88]。リズヴィチの研究を踏まえたうえで、マフムトチェハイッチが強調するのは、アンドリッチがム

スリム文化に無知であること、アンドリッチ作品におけるムスリムは芸術的な創造力によって生み出された存在であること、その架空のムスリムが現実のムスリムを排除する、ということである。アンドリッチ作品とリアリズムとの関わりについてはこれまでもさまざまに議論されてきたが[89]、ここでの批判は、作品の受容の問題であって[90]、作品そのものに帰せられるものではない。マフムトチェハイッチは次のように語る。「しかし、誰もが無知を逃れられない。知識が限定されているということは愛が限定されていることを意味する。アンドリッチのボスニア愛に関して言えば、ボスニアのムスリム性とムスリムのボスニア性への彼の無知によって限定されている。」[91] ことさらに「愛」が強調されるのは、アンドリッチが短篇「1920 年の手紙」においてボスニアを「憎悪の地」と表現したからであろう。「アンドリッチ主義」とは何か、「虐殺のための美学」とは何かがこの論文で明らかにされることはない。それらは自明のこととして扱われ、代わりにムスリムの文化についての「正しい」知識が提供される。羊頭狗肉にも思える論文の目的は、ムスリムについて「無知」な読者を啓蒙することにある。

6. アイデンティティーの相克

ボスニア・ムスリムにおける一連のアンドリッチ批判は、イブラヒモヴィチが指摘するように、「アイデンティティーを求める根深い話に通じる。ボスニアと（そのなかの）ボシュニャク人のアイデンティティー、文学作品と（そのなかの）アンドリッチのアイデンティティー」[92]。しかし、ナショナリズムにもとづくアイデンティティーの模索と文学の結びつきについて、サイードが厳しい姿勢を示していたことを想起しておきたい。「文化的アイデンティティーをめぐるこうした関心は、いかなる書物や権威が「われわれの」伝統をかたちづくっているかをめぐる論争へと発展した。概して、この本あるいはあの本が「われわれの伝統」の一部である（あるいは一部ではない）と語りたがるのは、想像しうるかぎりもっとも脆弱な精神のなせるわざのひとつであろう。そのうえ、その判断は、歴史的な知識に貢献するどころか、あまりにもしばしば歴史をゆがめるものとなる」[93]。

たしかに、アンドリッチの「主要作品はユーゴスラヴィアという想像の共同体をつくる役割を果たして」いた[94]。そこに政治性を見出し、アンドリッチを否定することで新たなアイデンティティーの形成を模索することは、過去の「文学受容のモダリティ」[95]の踏襲と言えるかもしれない。言い換えれば、ユーゴスラヴィア時代に正典（カノン）化されたことが、現在までのアンドリッチ批判に結びついている。フィリポヴィチがディズダルを論じながらアンドリッチに言及せずにいられないのも、マフムトチェハイッチがアンドリッチを他者とみなしながら、「ボスニアに生きること、ボスニアと生きることは、自らの発見を意味することだが、アンドリッチへの尊敬なし

には不可能である。アンドリッチがどれほどボスニアのムスリム性に無知であったとしても」[96] と述べるのも、アンドリッチの描くボスニアがあまりに権威を持ってしまったためであろう。こうして、アンドリッチの文学は、「現代ではイデオロギーの公開論争の場となって」しまった[97]。

しかし、ボスニア・ムスリムが求めるような、あらゆる面で肯定的な、あるいは、一民族を中心に据えるような、ボスニア・アイデンティティーをアンドリッチ作品に見出すことはできない。すでに多くの研究者が指摘しているとおり、複数の周縁に位置することこそアンドリッチの精神だからである[98]。アンドリッチの描く共生は、理想郷ではなく、苦しい歴史と人びとの愛憎のうえに成立している。ナショナリズムと文学のずれに気づかず、歪んだ結びつきを作りだそうとする思考が、アンドリッチ・コンプレックスとも呼べる批判につながっている。

アンドリッチと同じく「ユーゴスラヴィア」の作家であろうとしたダニロ・キシュは、パリに「自由亡命」中の 1984 年、イヴォ・アンドリッチ賞を受賞した際のスピーチで、自らについてではなくアンドリッチの文学について語り、次のようなアンドリッチのことばで締めくくった。「少しずつ苦労をしながら書いている。祖国なしでは何もない。けれど、私は祖国とともに生きることも、祖国なしで生きることもできない」[99]。それぞれの思い描く「祖国」はそれぞれに異なるだろう[100]。しかし、その一つ一つに苦悩と愛を認めた先に、「文学におけるボスニア精神」（フィリポヴィチ）を真に見出す可能性があるかもしれない[101]。ボスニア・ムスリムによるアンドリッチ批判はそうした葛藤の一つのプロセスである[102]。

注

1 アンドリッチと親交が深かったセルビアの作家ミロシュ・ツルニャンスキはアンドリッチ宛の手紙で「我々のなかであなただけがセルビア人でもクロアチア人でもなく、どちらでもある」と述べている（Радован Поповић, *Андрићева пријатељства,* Београд: Дечје новине, 1992, 121）。アンドリッチ自身も、一貫してユーゴスラヴィア主義であると述べている。このとき、ユーゴスラヴィア主義（Југословенство）は民族的ショーヴィニズム（националшовинизам）に対抗する概念として用いられていることに留意しておきたい。「オーストリア・ハンガリーを我々の炉辺から追い出さねばならないときから、私はユーゴスラヴィア主義だった…。我々サラエヴォのギムナジウムの生徒たちは、どれかの宗教、どれかの民族が覇権を持つことに反対だった。[…] 1941 年にユーゴスラヴィア共産党がマルクス主義的理念をあらゆる事柄に持ちこんだときも、私はユーゴスラヴィア主義だった…。私は 1948 年にもユーゴスラヴィア主義だった、そして今もそうだ。年老いて信じるものを変えるようなことはせず、このまま死ぬつもりだ。[…] セルビアのショーヴィニストたちに目のかたきにされたこともある…。ショーヴィニズムはどこでも同じで、

いつでも同じ目的だ。真の芸術と全き調和への反対。私がこう言うのも、あらゆる民族的ショーヴィニズムは、今話していたのもそうだが、いつも隠された目的を持っており、我々作家にとって重要な仕事の一つは、一歩ごと、必要なときにいつでもそれに抵抗することだからだ。」Љубо Јандрић, *Са Ивом Андрићем,* Београд:Српска књижевна задруга, 1977, 73–74.

2 ボスニア・ムスリムが 1993 年以降に「ボシュニャク人」を民族名とするプロセスについては、齋藤厚「「ボスニア語」の形成」『スラヴ研究』48 号、2001、113–137 に詳しい。本論文では引用部をのぞき、ボスニア・ムスリムで統一する。「ボシュニャク人（Bošnjak）」は「ボスニア人」と訳されることも多いが、ムスリム以外を含みうる「ボスニア人（Bosanac）」と区別するため、「ボシュニャク人」と訳す。

3 Celia Hawkesworth, “Ivo Andrić as Red Rag and Political Football,” *The Slavonic and East European Review*, 80(2), 2002, 205.

4 Hawkesworth, 206; Omer Karabeg, “Andrić u krivom ogledalu,” *Most*, 20. februar 2011.［https://www.slobodnaevropa.org/a/most_rse_ivo_andric_u_krivom_ogledalu/2314866.html］（以後、閲覧はすべて 2018 年 9 月 2 日）

5 Hawkesworth, 205. ヴィシェグラードでは 1992 年春にセルビア人によるムスリム虐殺が行われ、町はセルビア人の支配下に入り、ムスリムは一人もいなくなった。1995 年 3 月、ソコロヴィチ橋に 200 人近くの作家、政治家、正教会関係者が集まり、『ドリーナの橋』刊行 50 年とアンドリッチ没後 20 年を記念した会が催された。ラドヴァン・カラジッチがアンドリッチの像を除幕し、ドブリッツァ・チョシッチがセルビア人はボスニアで正義の闘いを行ったとして、「イヴォ・アンドリッチもその目的のもとにヴィシェグラードに我々とともにある」と述べたという。Ivo Žanić, “Pisac na osmi: upotreba Andrićeve književnosti u ratu u BiH,” *Erasmus*, 4(18), 1996, 56.

6 *Vox,* vol. 6, September, 1990. これは、アンドリッチの代表作『ドリーナの橋』において、キリスト教徒の農民が串刺しにされる場面の引用である。サラエヴォ出身の映画監督エミール・クストゥリツァは自伝でこの表紙について触れ、ムスリムがアンドリッチに向けた憎悪に対して、憤りと失望を記している。Емир Кустурица, *Смрт је непровјерена гласина,* Београд: Новости, 2010. クストゥリツァから見たアンドリッチについては、奥彩子「ボスニアの奇想」小川公代、村田真一、吉村和明編『文学とアダプテーション』春風社、2017、315–339 を参照。

7 Ivo Žanić, 48–57; Станиша Тутњевић, *Динамика српског књижевног простора,* Бања Лука: Глас српски, 2000; Bogdan Rakić, “The Proof Is in the Pudding: Ivo Andrić and His Bosniak Critics,” *Serbian Studies*, 14(1), 2000, 81–91; Radmila J. Gorup, “Reader as Critic: Ivo Andrić’s Bosnian Chronicle,” *Serbian Studies*, 15(2), 2001, 217–228; Hawkesworth, 201–216; Ivan Lovrenović, “Ivo Andrić, Paradoks o šutnji,” *Motrišta*, 41, 2008, 49–84; Kim Sang Hun, “Andrić as an Object of Hate: Reception of Ivo Andric’s Works in the Post-Yugoslav Context,” *Slavistična revija*, 59(1), 2011, 49–63. など。

8 田中一生「アンドリッチの「アリヤ・ジェルゼレズ」」柴宜弘、佐原徹哉編『バルカン学

のフロンティア』彩流社、2006、67–89. 栗原成郎もアンドリッチの訳書の解説において、「シナンの僧院に死す」に関するリズヴィチの批判を不適切と述べている。栗原成郎「解説　イヴォ・アンドリッチ――作家と作品――」イヴォ・アンドリッチ『宰相の象の物語』栗原成郎訳、松籟社、2018、243–244.

9 Rusmir Mahmutćehajić, “Andrićism: An Aesthetics for Genocide,” *East European Politics and Societies*, 27(4), 2013, 619–667. この論文はのちに他の論考も合わせてベオグラードで出版された。その際、副題は「記憶の倫理に抗して」に改変されている。Rusmir Mahmutćehajić, *Andrićestvo: protiv etike sjećanja*, Beograd: Clio, 2015. 本論文では英語版を用いるが、適宜ボスニア語版も参照した。

10 Muharem Bazdulj, “Ivo Andrić između Mahmutćehajića i Kuljiša,” *Oslobođenje*, 17.09.2013. ［https://pescanik.net/ivo-andric-izmedu-mahmutcehajica-i-kuljisa/］

11 Борис Булатовић, *Идеолошки аспекти у критичком и књижевноисторијском сагледавању српске књижевности у 20. веку,* Докторска дицертација, Универзитет у Новом Саду, 2016.

12 ジョルジェヴィチは、アンドリッチ研究を概観するなかで、「反アンドリッチ学の統合（Синтезе антиандрићолога）」という章を設けて論じている。Милош Ђорђевић, *Нова Књига о Андрићу,* Вршац: Висока школа струковних студија за васпитаче „Михаило Палов”, Нови Сад: Градска библиотека у Новом Саду, Грац: Институт за славистику Универзитета „Карл Франц”, 2016, 194–232.

13 Radovan Popović, *Kazivanja o Andriću*, Beograd: Sloboda, 135.

14 アンドリッチの年譜については、栗原「解説　イヴォ・アンドリッチ――作家と作品――」221–239 を参照。　セルビアでは文学創作に関わる詳細な伝記研究も出版されている。Žaneta Đukić-Perišić, *Pisac i priča: stvaralačka biografija Ive Andrića*, Novi Sad:Akademska knjiga, 2012.

15 Радован Поповић, *Андрић Биографија нобеловца,* Источно Сарајево: Завод за уџбенике и наставна средства, 2006, 7.

16 Hawkesworth, 202.

17 Поповић, *Андрић Биографија нобеловца,* 8.

18『ボスニアの妖精』（1885–1914）は四人の教師によって刊行された雑誌でセルビア、クロアチア、ムスリムといった個別の民族主義を否定し、南スラヴの文化的統一を説くものであった。「青年ボスニア」と『ボスニアの妖精』の密接な関係については、Predrag Palavestra, “Young Bosnia: Literary Action 1908–1914,” *Balcanica,*41, 2010, 155–184 を参照。

19 Zoran Konstantinović, “O Andrićevom doktoratu,” in Ivo Andrić, *Razvoj duhovnog života u Bosni pod uticajem turske vladavine*, Banja Luka/Beograd: Zadužbina “Petar Kočić,” 2012, 170.

20 1920 年ごろから創作言語がイェ方言からエ方言に変化していく。クロアチアでは、アンドリッチが生きているころから、エ方言の選択を批判する者がいた。アンドリッチ自身は方言の変化を文学上の理由であると語っている。「作家は、言語に専念する言語学者ではないが、自らの考えにもっとも適合する言語ヴァリエーション、表現を選ぶ必要がある。クルレジャも 1923 年まで『共和国』にエ方言で書いていた。私は、イェ方言のことばは

エ方言に比べて少し長く、少し悲しげだと書いたことがある。」Јандрић, 131–132. たとえば、アンドリッチの初期の詩 5 篇（1911–1912）は、エ方言、エ方言、イェ方言、エ方言、エ方言の順で書かれており、方言の選択は文学言語の模索であるという作家の主張を裏付ける。また、ロヴレノヴィチはアンドリッチが「シュト方言」の作家であることを強調し、イェ方言とエ方言はそのなかのヴァリエーションに過ぎず、アンドリッチがどちらかを選んだと明確にすることはできないと述べている。Lovrenović, 82–83. スネルはアンドリッチ作品の言語構成の多様さ（語り手はエ方言、登場人物はイェ方言、トルコ語からの借用語の使用、ドイツ語、ラディーノ語の痕跡もある）を主張し、「近年のナショナリストの解釈はこの言語的複雑さを単純化している」と述べている。Guido Snel, “The footsteps of Gavrilo Princip: The 1914 Sarajevo assault in fiction, history and three monuments,” Marcel Cornis-Pope, John Neubauer eds., *History of the Literary Cultures of East-Central Europe*, vol.1, 2004, 211.

21 Adil Zulfikarpašić（1921–2008）はボスニア南東部の町フォチャの名家に生まれた。16 歳にして共産党に入党し、ストライキを組織してギムナジウムを退学になった経歴を持つ。39 年のクルレジャと共産党との論争に際し、クルレジャ側に立つことを表明したため、一時期除党処分となった。第二次世界大戦時にはパルチザンに参加し、ウスタシャに捉えられて死刑宣告を受けるが減刑されて、その後、脱走に成功する。ティトーによる新国家が樹立されたときに、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国の貿易大臣補佐官になるが、46 年 2 月には共産主義政権と袂を分かち、イタリアに政治亡命した。その後ウィーンとグラーツで政治学を学び、ビジネスで成功を収める。ボスニア移民のネットワークづくりに関心を持つようになり、『ボサンスキ・ポグレディ』の刊行に至った。［http://www.bosnjackiinstitut.ba/home/sadrzaj/74］

22 Smail Balić（1920–2002）はモスタルに生まれ、もっぱらドイツ語圏で研究活動を行った。研究対象はボスニアとイスラームの歴史文化である。

23 *Bosanski Pogledi : nezavisni list muslimana Bosne i Hercegovine u iseljenistvu (1960–1967)* , London : Pretisak, 11.

24 *Bosanski pogledi*, 11.

25 *Bosanski pogledi*, 121. 記事に署名はないが、翌月号のズルフィカルパシッチの「序文にかえて」と酷似しており、本人の手になるものと考えられる。

26『正書法便り』*Pravopisni BILTEN* は Hadži Todor Dimitrijević (1889–1977) が 1951 年に創刊した同人誌で、1959 年には一時的な出版停止処分を受けた。ディミトリイェヴィチは言語の純粋さを主張し、多くの論争を行った。『ボサンスキ・ポグレディ』が引用した記事は、アンドリッチがトルコ語やドイツ語を作品に持ち込んでいること、文法的な間違いを犯していることなどから、偉大な作家とは言えないと主張している。

27 *Bosanski pogledi*, 130–131. アンドリッチの博士論文が印刷物となったのは 1982 年のセルビア語訳が初めてであり、それまではグラーツ大学で閲覧しない限りは見られなかった。ブラトヴィチは、スマイル・バリッチが 1945 年にウィーン大学に提出した博士論文『ボスニア・ヘルツェゴヴィナのイスラームにおける精神的な推進力』とアンドリッチ

の博士論文の類似から、記事の署名「B」がバリッチであると推測している。Булатовић, 92–93.

[28] Rakić, 82.

[29] クルトヴィチの経歴については、Станиша Тутњевић, “Напомена,” *Свеске Задужбине Иве Андрића*, 9–10, 1994, 435.

[30] Шукрија Куртовић, *О национализовању муслимана*, Сарајево: Народа, 1914.

[31] クルトヴィチのエッセイは、トゥトニェヴィチが編集した増補版 Шкрија Куртовић, “На Дрини ћуприја и Травничка хроника од Иве Андрића у свјетлу братства и јединства,” *Свеске Задужбине Иве Андрића,* 9–10, 1994, 387–434 を用いる。

[32] Куртовић, 389. ラキッチはクルトヴィチ自身が「ボスニア人――トルコ人」と表現していると指摘する。Rakić, 84.

[33]『ドリーナの橋』の末尾に付された「トルコ語用語集」には「トルコ人とトルコのという呼称が物語内でボスニア・ムスリムの世界を指して使われるが、もちろん、人種的、民族的な意味ではなく、間違えたまま古くからの習慣となっている呼称としてである」と注記がある。Иво Андрић, *На Дрини ћуприја,* Београд: Просвета, 1945, 363. 歴史的に、「ムスリムはオスマン国家の民という意味で「トルコ人」と呼ばれ」ていた。佐原徹哉「ボスニアのムスリム・コミュニストにとっての宗教とネイション」酒井啓子、臼杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』東京大学出版会、2005、84.

[34] Булатовић, 95. スネルは、語り手が登場人物の上位に存在すること、またこの語り手に権威が与えられてきたことに、アンドリッチ作品の脆弱さがあると指摘している。Snel, 215.

[35] Куртовић, 434.

[36] トゥトニェヴィチの見解では、クルトヴィチは自身の論考が移民雑誌に掲載されるプロセスに関与していない。Тутњевић, 436.

[37] *Bosanski pogledi*, 134.

[38] *Bosanski pogledi*, 134.

[39] 佐原、84.

[40] ロバート・J・ドーニャ、ジョン・V・A・ファイン『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史』佐原徹哉、柳田美映子、山崎信一訳、恒文社、1995、104. ここでいう「bošnjaštvo」はボスニアに住む人々を指している。

[41] Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia*, Ithaca: Cornell University Press, 1984, 360–361.

[42] ドーニャ、180–183.

[43] 長島大輔「人口調査の政治性」柴宜弘、木村真、奥彩子編『東欧地域研究の現在』山川出版社、2012、172.

[44] Sevan Philippe Pearson, “Muslims’ nation-building process in socialist Bosnia and Hercegovina in the 1960s,” *Nations and Nationalism*, 24(2), 2018, 440–441.

[45] Muhamed Filipović (1929–) はバニャ・ルーカの生まれ。サラエヴォ大学で博士号を取得し、哲学部教授となる。主要な著書に『レーニン――その思想』。1990 年、アリヤ・イゼトヴェ

ゴヴィチらとともに民主行動党を設立するが、同年、アディル・ズルフィカルパシッチとともにムスリム・ボシュニャク人組織（MBO）を結党。2014 年からボシュニャク科学芸術アカデミー（BANU）会長。

46 Mehmedalija Mak Dizdar (1917–1971) はフィリポヴィチの文章が掲載された雑誌『人生（Život）』の編集長をしていた。ボスニアの中世への強い関心が、ボスニアに散在する中世の墓碑（2016 年に世界遺産登録）を題材にとった詩集『石の眠り人（*Kameni spavač*）』へとつながった。

47 Muhamed Filipović, “Bosanski duh u književnosti—Šta je to?,” *Duh Bosne*, vol.1, 2006, 4. (初出は、Muhamed Filipović, “Bosanski duh u književnosti—Šta je to?,” *Život*, 16, no.3, 1967.)［http://www.spiritofbosnia.org/bs/volume-1-no-1-2006-january/the-bosnian-spirit-in-literature-what-is-it/］。

48 Filipović, 15.

49 Булатовић, 112.

50 СтанишњаТутњевић, *Размеђа књижевних токова на Словенском Југу*, Београд: Службени гласник, 2011, 418.

51 Булатовић, 112.

52 Staniša Tutnjević, *Književne krivice i osvrte: osvrt na knjigu* Književni život Bosne i Hercegovine između dva rada *M. Rizvića*, Sarajevo: Svjetlost, 1989, 96–110.

53 たとえば、後述するリズヴィチが 1980 年に出版した 3 巻本『両戦間期のボスニア・ヘルツェゴヴィナの文学界』*Književni život Bosne i Hercegovine između dva rata*。トゥトニェヴィチは反論本『文学的断罪と復讐』*Književne krivice i osvrte* を 8 年をかけて書いている。田中、88–89.

54 Rakić, 82.

55 トゥトニェヴィチによれば、タイトルは「イヴォ・アンドリッチ作品におけるボスニア」に改変され、内容においてもユーゴスラヴィアの「友愛と団結」を論じている部分が削除されている。Тутњевић, “Напомена,” 437.

56 実行者ムラト・シャバノヴィチが 2000 年に『自由ボスニア（Slobodna Bosna）』に答えたインタヴューによる。シャバノヴィチは民主行動党からアンドリッチの胸像を壊すように指示を受けたと述べている。［http://www.e-novine.com/feljton/34459-Behmen-ruenje-Andrieve-biste-obeao-radnju-Baariji.html］

57 たとえば、ホークスワースは相対性こそアンドリッチ文学の本質であり、「不注意な読みをすれば全く不当な結論に簡単にたどりつく」と述べている。Hawkesworth, 205.

58 トゥトニェヴィチはクルトヴィチの論文が国内で発表を拒否されたのは、アンドリッチ批判をしたからではなく、「アマチュアの書き物」であるからだと述べている。Тутњевић, “Напомена,” 436. また、キムによれば、アンドリッチをボスニア文学とみなさない態度はごく一部のムスリム知識人に限定されており、一般には浸透していない。Kim, 57.

59 中井亜佐子『他者の自伝』研究社、2007、67–88. 中井は、ラシュディ事件をめぐって、読むことの政治性を鋭く指摘しながらも、「よく読むこと」こそが『悪魔の詩』の主題で

あるという読解を提示する。そして、「だが、このような能力のあるエリート読者だけが『悪魔の詩』を読んでいたなら、ラシュディ事件のようなできごとは起こらなかっただろう。皮肉なことには、そのような狭小な解釈共同体のなかだけで自己満足的に享受されるには、ラシュディの物語の力はあまりにも巨大だったのである。」と結論づける。しかし、中井自身も言及しているように、ラシュディ事件にはイギリスの移民政策と移民側の思惑といった政治的背景が指摘されている。2015 年のシャルリー・エブド事件を考えても、非読者層からのネガティヴな反応は、作品に内在する力より、作品が置かれた社会的コンテクストに依存するところが大きいのではないだろうか。

60 Muhsin Rizvić, *Bosanski muslimani u Andrićevu svijetu*, Sarajevo: Ljiljan, 1995. 実際に刊行されたのは 1996 年 3 月である。出版記念イベントは極めて政治的な雰囲気のなか行われ、「アンドリッチと彼の作品についての最終決着」として紹介された。このとき、後述のエサド・ドゥラコヴィチが登壇し、アンドリッチを「文学におけるボスニアのオスマン化」として非難した。Žanić, 49. リズヴィチの著書の目次と「アリヤ・ジェルジェレズの旅」にかかわる評については、田中、67–89 に詳しい。初版は、文学研究書としては例外的に多い、5000 部であった。また現在では、リズヴィチの HP から PDF 版をダウンロードして読むこともできる。こうしたアクセシビリティの良さが影響の広がりにつながった可能性は否定できない。［http://www.muhsinrizvic.ba/］

61 主要な著作のなかで『サラエボの女』だけが扱われていない。Булатовић, 141.『サラエボの女』は『ドリーナの橋』『ボスニア物語』と同時期に書かれた作品である。また、リズヴィチがアンドリッチの同性愛的傾向を示唆するために未完の小説まで扱っていることを考えると、女性が主人公である『サラエボの女』を検討しないことには不自然さがある。もっともリズヴィチの著書は死の床で執筆されたものなので、『サラエボの女』に触れるつもりが全くなかったとも言えない（ただし、死の直前に完成したとされていて、未完の扱いではない）。

62 ゴルプは歴史資料の用い方に関するリズヴィチのアンドリッチ批判について、『ボスニア物語』についての研究を挙げて具体的に反論している。Gorup, 222–228.

63 したがって、リズヴィチによると、社会主義ユーゴスラヴィアにおいて「友愛と団結」が強調されるようになってからは、アンドリッチはボスニアの「憎悪」について書いていない。Rizvić, 634. ブラトヴィチはアンドリッチの執筆活動において、博士論文を文学作品の理論的、理念的基盤と捉えるのであれば、博士論文から「セルビア傾倒」的なものを見出さなければならないが、それは見いだせないと指摘している。Булатовић, 143.

64 Rizvić, 634.

65 ジャニッチはリズヴィチが文学的方法論に徹さずに、「浅薄な心理主義と伝記主義に基づくイデオロギーの非難を書いた」と批判している。また、文学批評家のレシッチの次のような言葉を引用している。「文学作品は、事実を正しく記述するのでも、事実を偽って記述するのでもない」。この言葉はのちにカザズの論文でも引用された。Žanić, 52.

66 イヴォ・アンドリッチ『ボスニア物語』岡崎慶興訳、恒文社、1972、378.

67 Rizvić, 437.

[68] Rakić, 87.

[69]「復興」の歴史についてはHPを参照。[http://preporod.ba/o-bzk-preporod/historija-preporoda/]

[70] Rakić, 91. 田中はリズヴィチの執筆動機について「新生ボスニアにムスリム一色のアイデンティティーを確立したい当局の意を受けて（あるいは察して）急遽まとめられた欠陥多き書物ではあるまいか」と疑念を表している。田中、87.

[71] これに関連して、ムスリムの名称をやめてボシュニャク人を採用している。詳しくは齋藤、125–126を参照。『アンドリッチの世界におけるボスニア・ムスリム』の「編集注記」には、著者の希望により、「ボスニア・ムスリム」の語を「ボシュニャク」に置換したとある。タイトルの「ボスニア・ムスリム」を変更しなかった理由は定かではない。

[72] Hawkethworth, 212.

[73] ロヴレノヴィチはリズヴィチの仕事を「アンドリッチを「反ムスリム主義」として咎めるもっともシステマティックなカタログ」と表現している。Lovrenović, 69.

[74] Muhsin Rizvić, *Književne studije*, Sarajevo: BZK Preporod, 2005, 44. また、この本に収録されている「アンドリッチ」は、リズヴィチによる1985年の文学史に収録されているもので、批判的な内容は含まれていない。Muhsin Rizvić, *Pregled književnosti narod Bosne i Hercegovine*, Sarajevo: Veselin Masleša, 1985, 207–214. ちなみに、アンドリッチをイスラーム学から批判したものとして最初に挙げられるのは、アレクサンダル・ポポヴィチの「イヴォ・アンドリッチと「イスラーム世界」」（1982）である。ポポヴィチはこのような批判が適切かどうか自体がまず問われるだろうが、と注釈をつけたうえで、アンドリッチのイスラームに関する知識の乏しさを指摘した。Александар Повповић, “Иво Андрић и ‘Кућа Ислама’,” *Дело Иве Андрића у контексту европске књижевности и културе*, уредник Драган Недељковић, Београд: Задужбина Иве Андрића, 1981, 505–516.

[75] *Andrić i Bošnjaci*, urednik Munib Maglajlić, Tuzla: BZK Preporod, 2000.

[76] *Andrić i Bošnjaci*, 7. この文章に署名はないが、編者マグライリッチが書いたものと思われる。Булатовић, 164.

[77] カザズは、公平を装った欺瞞的なタイトル、恣意的構成、分析手法の不確かさなどを指摘し、収録された論文のほとんどを修正主義と痛烈に批判した。これに対して編者マグライリッチが反論し、公開論争となった。Enver Kazaz, “Egzistencijalnost/povijesnost Bosne-interpretacija u zamci ideologije,” *Novi izraz*, 10–11, 2001, 120–136. 各論文についてはトゥトニェヴィチとブラトヴィチが詳しく論じている。Тутњевић, *Размеђа књижевних токова на Словенском Југу*, 403–419; Булатовић, 160–189.

[78] Esad Duraković,“Andrićevo djelo u tokovima ideologije evrocentrizma,” *Andrić i Bošnjaci*, 192–206.（初出は、Esad Duraković, “Andrićevo djelo u tokovima ideologije evrocentrizma,” *Znakovi vremena*, 1(2), Sarajevo, 1997, 97–108.）

[79] エドワード・W・サイード『オリエンタリズム　上』板垣雄三、杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー、1993、21.

[80] Duraković, 193–194.

[81] Duraković, 198.

[82] Duraković, 206.

[83] アンドリッチ作品をヨーロッパ中心主義あるいはポストコロニアル批評の観点から考える可能性については、複数の研究者から指摘されている。Kazaz, 126; Lovrenović, 70–72 など。一方、アンドリッチの博士論文について、田舎と都会という観点から検討する必要性の指摘もある。Catharina Raudvere, Krzysztof Stala and Trine Stauning Willert eds., *Rethinking the Space for Religion. New Actors in Central and Southeast Europe on Religion, Authenticity and Belonging*, Nordic Academic Press, 2012, 277.

[84] Duraković, 200.

[85] ブラトヴィチは「アンドリッチの創作は帝国主義ではなく、むしろ反帝国主義的枠組みにある」と述べている。Булатовић, 171. ロンギノヴィチはアンドリッチの博士論文にヨーロッパ中心主義を認めつつ、その背景にはオスマン帝国の遺産があり、ユーゴスラヴィア理念を実現するためにボスニアの三つの宗教が結束するという歴史的文脈があったとしている。また合わせて、ロンギノヴィチはアンドリッチの作品が「オリエンタリズム」の視線の対象となることもあったことを指摘している。Tomislav Longinović, *Vampire Nation: Violence as Cultural Imaginary*, Duke University Press, 2011, 119–127.

[86] オリエンタリズムの二項対立とは異なる特殊性をバルカンに見出した研究として、「ネスティング・オリエンタリズム」（Milica Bakić-Hayden, “Nesting Orientalisms: The Case of Former Yugoslavia,” *Slavic Review,* 54(4), 1995, 917–931）、「バルカニズム」（Maria Todorova, *Imagining the Balkan*, Oxford University Press, 1997）などがあるが、いずれもヨーロッパと、ヨーロッパの内部としてのバルカンとの権力関係に着目しており、オスマン帝国による支配と被支配の関係を射程には入れていない。カザズは、サイード自身が「アラブ世界に対するイスタンブールの支配」（エドワード・W・サイード『文化と帝国主義 1』大橋洋一訳、みすず書房、1998、20）という表現でその可能性を示していることを指摘している。Enver Kazaz, “Andrić piše iz pozicije rubnoga identiteta,” *Dani*, br.226, 05.10.2001.［https://www.bhdani.ba/portal/arhiva-67-281/226/reagiranja.shtml］オリエンタリズムとバルカンに関する研究史は、Dušan I. Bjelić, “Introduction: Blowing Up the “Bridge”,” Dušan I. Bjelić and Obrad Savić eds., *Balkan as Metaphor: Between Globalization and Fragmentation*, MIT Press, 2002, 1–22 を参照。

[87] そこではまず、ムスリムの知的伝統が滔々と語られる。たとえば、「善と美は一体でなければならない。神が一つであるように。預言者ムハンマドは神について言った、「彼は美しく、美を愛する」。またこうも言った「あらゆる善は神の手にある。悪は神のもとにはない」」Mahmutćehajić, 628.

[88] ブラトヴィチは、マフムトチェハイッチの学術的ではない文章が掲載されたのは、編集委員の一人であるイェール大学名誉教授イヴォ・バナツの推薦があったのではないかと推測している。Булатовић, 191–192.

[89] 古くは、ヨヴァノヴィチによる「イヴォ・アンドリッチの偽りのリアリズム」（1936）がある。Ђорђе Јовановић, “Привидни реализам Ива Андрића,” *Студије и критике*, Београд: Просвета,

1949, 187–190.（初出は、Јовановић, “Привидни реализам Ива Андрића,” *Naša stvarnost*, 1(3), 1936, 133–135.）

[90] たとえば、ドーニャとファインによる概説書『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史』の「文献案内」は、「オスマン・トルコ時代（1453–1878）」の文献三冊のうち二冊がアンドリッチの小説である。アンドリッチ作品のこのような扱いが、小説が歴史的事実を乗っ取るとの批判を招く要因になることは否定できない。ドーニャ、xv.

[91] Mahmutćehajić, 664.

[92] Nedžad Ibrahimović, “Kontekst u tekstu ili fiktivna biografija u nejasnom interpretacijskom kontekstu,” *Andrić i Bošnjaci*, 76.

[93] サイード、『文化と帝国主義　1』、25.

[94] Andrew Wachtel, “Imagining Yugoslavia: The Historical Archeology of Ivo Andrić,” Wayne S. Vucinich ed., *Ivo Andrić Revisited : The Bridge Still Stands*, Berkely: University of California, 1995, 83.

[95] Snel, 215.

[96] Mahmutćehajić, 664.

[97] Kazaz, 120.

[98] Hawkesworth, 204–205; Kazaz, “Andrić piše iz pozicije rubnoga identiteta.”; Longinović, 119–125.

[99] “Danilo Kiš—Dodela Andrićeve nagrade.”［https://www.youtube.com/watch?v=2cGHE8QFGXg］引用文は、アンドリッチがローマ赴任中の 1921 年にズデンカ・マルコヴィチに送った手紙に書かれている。“Андрићева писма Зденки Марковић,” приредио Мирослав Караулац, *Свеске Задужбине Иве Андрића,* 9–10, 1994, 133.

[100] アンドリッチ自身はボスニアを「精神的な祖国」と呼んでいる（Јандрић, 296）。ロヴレノヴィチはアンドリッチの発言「私のすべてはボスニアからきている」に触れ、もし今アンドリッチに問うたら「ボスニアの作家（bosanski pisac）」と答えるだろうと述べている。Ivan Lovrenović, *Duh iz sindžira*, Zagreb: Durieux, 2005, 367. バズドゥリはマフムトチェハイッチによるアンドリッチ批判と、クリシのマフムトチェハイッチ批判のどちらにも瑕疵があることを指摘したあとで、次のように締めくくる。「アンドリッチのボスニアも、文学上も現実にも、良くもなく悪くもなく、最善でも最悪でもなく、ほかのあらゆる国のように、普通でなく、実際にはあらゆる国がそれぞれに普通ではないのだが、存在している。この先も二つの熱気、二つの誤解、二つの無知という、一見正反対の、だが実際にはかなり相似のものの間で存在しつづける。ボスニアがそうであるように、アンドリッチも一人である。」Bazdulj,“Ivo Andrić između Mahmutćehajića i Kuljiša.”

[101] トゥトニェヴィチは南スラヴ文学を扱った浩瀚の書の第四章において、アンドリッチのみならず、セリモヴィチ、ディズダルといった他の作家も扱ってボスニア文学とアイデンティティーを論じている。Тутњевић, *Размеђа књижевних токова на Словенском Југу,* 259–493.

[102] この葛藤は、現在のサラエヴォのギムナジウムの教科書にも見られる。四年次向けの『読

本』は、アンドリッチを「ボスニア・ヘルツェゴヴィナの作家」と位置づけているが、その論拠にはユーゴスラヴィア時代の 1981 年に発表されたハムジヤ・デミロヴィチの文章が用いられている。また、作品抜粋には『ドリーナの橋』や『ボスニア物語』ではなく、『呪われた中庭』が選ばれている。末尾では、「今日のアンドリッチ作品の受容は論争になっており、異なる視点を知るために次の書籍を勧める」として、推薦図書が四冊挙げられている。そのなかには、リズヴィチの『アンドリッチの世界におけるボスニア・ムスリム』と論集『アンドリッチとボシュニャク人』が入っている。Vedad Spahić, Č*itanka za* četvrti *razred gimnazije*, Sarajevo: Sarajevo Publishing, 2003, 86–89.

Slavia Iaponica 22 (2019)

Dialectic of Bosnian Identity: Anti-Andrić Discourses of Bosnian Muslims

Ayako OKU

Ivo Andrić (1892–1975), the Nobel Prize laureate, was once unquestionably the most respected writer in former Yugoslavia. He was regarded as a genuine "Yugoslav" writer, a position which he deservedly assumed. After the dissolution of Yugoslavia, however, he and his works were harshly attacked or abused by Bosnian Muslims, Croatians and Serbians. The purpose of this paper is to reveal what underlies the so-called "anti-Andrićism" of Bosnian Muslims.

Andrić was born to a Catholic family in middle Bosnia. His father died when he was two years old, and he was left in the care of his aunt in Višegrad. Andrić grew up in this town, famous for its bridge overlooking the Drina River, spending a lot of time reading. His childhood inspired his emblematic work, *The Bridge on the Drina*. After primary school, he entered gymnasium at Sarajevo. At that time, he began to publish his poems, which were written either in the e-kavian (Serbian) or the ije-kavian (Croatian and Bosnian) dialect. During the First World War, he was arrested on charges of treason. After the war, he and his friends published the journal *Književni jug* in Zagreb, which is regarded as a milestone in the construction of Yugoslav literature. Then, he moved to Belgrade to work as a diplomat of the new government. After the Second World War, he published three novels, the so-called Bosnian trilogy, which established his reputation as a writer internationally. Soon, he became president of the Yugoslav Writers' Union. Because his life was interwoven with Bosnia, Croatia, Serbia, he represents the ideal of a "Yugoslav" writer.

Negative opinion against Andrić's works first appeared in the expatriate periodical *Bosanski pogledi* in 1961. The title of the essay was "*The Bridge on the Drina* and *The Chronicle of Travnik* by Ivo Andrić in Light of Brotherhood and Unity." The author, Šukrija Kurtović, was a Bosnian Muslim communist politician and journalist. Kurtović claimed that Andrić's two novels engender negative influences on the "Brotherhood and Unity" of Yugoslavia because of their antipathetic portrayal of Bosnian Muslims. In Kurtović's thoughts, "Bosnian Muslim" is not a distinct ethnicity, such as "Turk" in Andrić's works. Rather, Bosnian Muslims should be considered Serbs or Croats with different religious affiliations. The irony is that *Bosanski pogledi* declared itself anti-communist. It was held by Adil Zulfikarpašić, a former communist intellectual in exile. In the journal, not only Kurtović, but also editors Zulfikarpašić and Balić, wrote articles against Andrić.

Another debate arose in Bosnia itself. In the 1960's, the political status of Bosnian Muslims changed significantly: they were no longer an ethnically ambiguous minority but a constituent nation of the Federal Republic. In this context, Muhamed Filipović, a professor at Sarajevo University, wrote an essay entitled "The Bosnian Spirit in Literature—what is it?" (1967). In this essay, Filipović praised Mak Dizdar's poetry book, *The Stone Sleeper*, as the quintessence of Bosnian spirit, condemning other non-Muslim Bosnian writers, including Petar Kočić, Svetozar Ćorović and Ivo Andrić. Filipović's work triggered an intense debate involving other scholars.

After the breakup of Yugoslavia, these two currents of criticism in and out of Bosnia were combined by Muhsin Rizvić, a professor at Sarajevo University and a president of Preporod (a cultural organization for Bosnian Muslims). Rizvić's posthumous book, *Bosnian Muslims in the Works of Ivo Andrić* (1995), consists of over 600 pages analyzing Andrić's works, from his doctoral thesis to major novels, in terms of anti-Muslim prejudice. Rizvić's work provided a widely acknowledged basis for subsequent anti-Andrić bibliography.

In the 21st century, criticism against Andrić continues. Some draw a parallel between Andrić's attitude and the Orientalism formulated by Edward Said, even though the relationship between Bosnia and two empires (Ottoman and Austro-Hungarian) is not a simple binary opposition. On the other hand, the debate was introduced to English speaking readers by Mahmutćehajić's essay "Andrićism: An Aethetics for Genocide" (2013), where Andrić was criticized for ignorance of Islam. These criticisms are predominantly based on Rizvić's works, and they sometimes go beyond the limits of conventional literary criticism.

Lying beneath the dispute are the conflicts over "Bosnian identities," as Ibrahimović argues. Andrić's canonical works were the backbone of Yugoslav "imagined community." For those Bosnian Muslims who wished to construct a new national identity, denying Andrić was one feasible option. Indeed, the literary world of Andrić does not praise any single group of humans because it reflects the multiple marginality of the author. It is not by denying but by accepting this complexity that one may grasp the spirit of "Bosnian literature."